

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月18日現在

機関番号：22701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K20663

研究課題名（和文）臨床看護教育者の教育方法学習のためのシミュレーション教育プログラムの開発と評価

研究課題名（英文）Development and evaluation of simulation based training program to improve clinical educator's clinical education skills

研究代表者

大山 裕美子 (Oyama, Yumiko)

横浜市立大学・医学部・准教授

研究者番号：90736349

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：シミュレーション教育の手法は臨床教育者の教育能力を向上させる効果があるのかを明らかにするために、スコoping・レビューを実施した。その結果、臨床教育者、被教育者（学生、新人医療従事者）の双方のアウトカム評価より、シミュレーション教育には臨床教育者の教育能力を向上させる効果があることが明らかになった。その一方で、サンプルサイズが十分でないことやアウトカム測定が心理社会的尺度による短期的なアウトカム評価が多いことが課題であることが明らかになった。レビューの結果を基に、臨床教育者のスーパーヴィジョンのスキル向上を目指した動画教材の作成を行ったが、効果の評価には至らなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療の質を保つためには臨床実践の場で新人医療従事者の指導を担う臨床教育担当者の役割は重要性を増している。しかし、これまで臨床教育担当者が事前に教育に関するトレーニングを受ける機会は十分になかった。そのような中で、デブリーフィングをしながら具体的な教育方法を学ぶための方法としてシミュレーション教育が有用な方法となる可能性が示唆されていた。今回、本研究を実施したことで、その効果が明らかになり、臨床の場でどのように教育するのかを学ぶ場を臨床教育者に提供することが可能になったことは医療従事者だけではなく、医療従事者からケアを受ける患者にとっても意義がある。

研究成果の概要（英文）：The scoping review was conducted to evaluate an effect of simulation based training program to improve clinical educator's clinical education skills. As a results, we found a simulation based training effectively improved their clinical education skills. However, several limitations were revealed; most of studies had insufficient sample size and used short-term outcome evaluation using psychosocial measures for clinical educators and their students. Despite of we also developed a video scenario to improve supervision skills of clinical educators, we could not evaluate an effect of the scenario.

研究分野：看護管理学

キーワード：シミュレーション教育

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

超高齢化が進行する我が国では、医療の高度化・複雑化が進み、基礎教育の域をはるかに超えた知識・技術が求められている。その一方で、看護基礎教育修了者の教育背景や個人特性も多様化し、入職時の看護実践能力に差を生じさせる一因となっている。そのため、看護の質を保つためには臨床看護教育者を効果的に育成していくことは重要なことである。

しかし臨床看護教育者が教育指導の方法を具体的に学ぶ機会は限られ、デブリーフィング(振り返り・内省)やフィードバックの機会を持つことができにくいことから、役割葛藤や精神的ストレスを生じやすく、それが職務継続にも影響することが指摘されている。また、臨床看護教育者の教育指導内容は新人看護職員の精神的健康状態にも影響することが明らかになっている。これらのことから、臨床看護教育者が具体的な教育指導の方法を学び内省やフィードバックの機会を意図的に持ちながら実地指導を行うことは、臨床看護教育者・新人看護職員双方にとって重要であるといえる。

デブリーフィング(振り返り)やフィードバックの機会を意図的に持ちながら学習者が教育方法を学ぶための方法として、シミュレーション教育がある。国外では、シミュレーション教育は臨床教育者が教育方法を学ぶ上で有用な方法となる可能性が示唆されており、その導入が少しずつ進められている。しかし国内では、臨床看護教育者が教育方法を学ぶことを目的としたシミュレーション教育プログラムはほとんど導入されておらず、その効果の検証に関する報告も見当たらない。

### 2. 研究の目的

本研究では、臨床看護教育者の教育指導方法の学習や実際の教育指導場面の問題の解決のためのシミュレーション教育プログラムを開発し、その効果を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

(1) 臨床看護教育者が教育指導方法を学習するうえで、困難を感じやすい要因を明らかにするためにインタビュー調査を行い、その結果をもとに質問項目を作成しウェブ調査を実施することとした。まず、インタビュー調査は臨床看護教育の経験がある看護師7名を対象に実施した。その結果、自律して学習を行う特性をもつ者がより教育指導方法の学習に困難を感じていないことが新たに明らかになったため、自律して学習を行う態度を測定する尺度もウェブ調査の調査項目に含めることとした。自立して学習を行う態度を測定する尺度として、Fisherら(2010)が開発した Self-Directed Learning Readiness Scale for Nursing Education(SDLRSNE)を採用した。しかし、日本語版が存在していなかったため、尺度翻訳・信頼性と妥当性の検証のプロセスを追加し、その後ウェブ調査(本調査)を実施することとなった。

#### 尺度翻訳

日本語版 SDLRSNE は、表面妥当性を担保した翻訳作成のガイドラインに準じて実施し、1) 日本語版 SDLRSNE 第1案の作成、パイロットテストの2つのステップを経た上で最終版を作成した。

まず SDLRSNE の開発者である Fisher 氏に日本語版作成に関する承諾を得たうえで、日本語を母語にする2名の翻訳者(尺度の使用目的を知る研究者1名、専門業者の翻訳者1名)が独立して英語を日本語に順翻訳した。次に2つの翻訳を尺度の使用目的や因子構造を知る研究者3名で議論したうえで統合し、暫定の日本語版とした。次に、逆翻訳は翻訳の専門業者(順翻訳の翻訳者とは別の翻訳者)に依頼し、暫定の日本語版を英語に逆翻訳した。逆翻訳されたものを開発者に送付し、オリジナル版の英語と相違がある項目は修正したうえで、日本語版 SDLRSNE 第1案とした。

作成した第1案の質問項目の表面妥当性を検討する目的で、2014年9月にウェブ調査によるパイロットテストを実施した。対象者は、A大学の博士後期課程に在籍する大学院生で看護師免許を有する者50名とした。まず研究者がパイロットテストの概要と回答フォームのURLを記載した協力依頼のメールをA大学の事務へ送信し、対象者へはA大学の事務を経由しメールが配信された。対象者には日本語版 SDLRSNE 第1案へ回答をしてもらい、その上で意味の分かりにくかった質問項目の有無、有ると回答した場合その具体的な内容についてのコメントを記入してもらった。

#### 日本語版 SDLRSNE の信頼性・妥当性の検証

信頼性・妥当性を検証するためにウェブ調査を実施した。対象者は看護師として就労している者1555名とした(コンビニエントサンプリング)調査項目は、日本語版 SDLRSNE(3因子40項目)の他に、潜在的な関連因子として、性別や年齢の他に、教育レベルなどについての項目を含んだ。項目分析に加えて、信頼性の検証のために、クロンバックの係数を算出し、妥当性の検証のために、確証的因子分析を実施した。

#### 本調査

ウェブ調査の対象者は臨床で新人看護職員の指導に携わる看護師1366名(コンビニエント

サンプリング)とした。調査項目は基本属性、日本語版 SDLRSNE や、学習上の困難感についてとした。

(2) シミュレーション型学習は臨床教育者の教育スキルの向上に効果があるのか、臨床教育者の教育スキル向上のためのシミュレーション教育プログラムへの示唆を得ることを目的とし、スコーピング・レビューを実施した。レビューの対象となったのは、医療従事者に対して教育スキルの向上を目的としたシミュレーション型学習を提供し、その効果を測定している論文である。それぞれの論文の質評価には、Fey ら (2015) がシミュレーション教育に関する研究論文の評価用に開発した評価ルーブリックを用いた。

(3) スコーピング・レビューの結果に基づき、医療従事者に対して教育スキルの向上を目的としたシミュレーション型学習のための教材を開発した。

#### 4. 研究成果

##### (1) ウェブ調査

###### 尺度翻訳

パイロットテストへの回答数 13 名 (回答率 26%)、うち意味の分かりにくかった質問項目が有ると回答したのは 7 名であり、項目 6, 10, 11, 16, 18, 27, 29, 33, 34, 38, 39 の 11 項目に関してコメントの記載があった。項目 6, 11, 34, 39 のオリジナル版の項目は "I prefer to..." であり、「～のほうが好きだ」としていたが、具体的な比較対象を想定してしまい答えにくいというコメントが複数あったこと、項目 16, 29, 38 "I like to..." の「～が好きだ」の表現と区別するため、「～することを好む」へ修正した。項目 27 は "I set specific times for my study" であり、「私は勉強するために特定の時間を設定する」としていたが、「特定の時間を指すものが分かりにくかったことから、「私は時間を決めて勉強する」とした。それ以外の 6 項目に関して研究者間で検討したうえで、翻訳の内容に問題はないと判断し、日本語版 SDLRSNE の最終版とした。

###### 日本語版 SDLRSNE の信頼性・妥当性の検証

回答者は 376 名であった (回答率 24.2%)。項目分析では、1 項目のみ Item-Total 相関が低かった。信頼性の分析では、クロンバックの係数は 0.781~0.836 と十分な信頼性を有していることが示された。妥当性の分析の結果、妥当性はあまり高くないことが占められた。そのため、日本語版 SDLRSNE の使用にあたっては、その点を考慮し使用する必要性が示唆された。

###### 本調査

268 名から回答が得られた。その結果、インタビューで得られた示唆と同様に、自己決定型の学習スキルを持つ者が、より困難を感じにくいことが明らかになった。そのため、教育プログラムを提供する際には、臨床教育者の学習傾向を把握した上で介入を行う必要が示唆された。

(2) 6 つの文献データベースを用いて検索し、最終的に 15 文献が評価の対象となった。文献の評価には、Fey ら (2015) のシミュレーションに関する研究論文の評価ルーブリックを用いた。その結果、臨床教育者、被教育者 (学生、新人医療従事者) の双方のアウトカム評価より、シミュレーション教育には臨床教育者の教育能力を向上させる効果があることが明らかになった。その一方で、評価ルーブリックのスコアが 30 点代に留まる論文がほとんどであった (0 点~64、42 点以上が望ましい)。その理由として、サンプルサイズが十分ではないことやアウトカム測定が心理社会的尺度 (臨床教育への自信、被教育者の臨床医教育への満足感など) による短期的なアウトカム評価が多いこと、介入内容 (シミュレーション教育内容) の決定が理論に基づいていないことが、スコアを下げている大きな要因となっていた。そのため、これらの課題を解決しながら教材の開発・評価を実施することの必要性が示唆された。

(3) スコーピング・レビューの結果に基づき、医療従事者に対して教育スキルの向上を目的とした動画教材を開発した。しかし、効果の評価までには至らず、プレテストのみでの活用となった。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 2 件)

1. Fujino-Oyama Y, Maeda R, Maru M, Inoue T. Validation the Japanese Self-Directed Learning Readiness Scale for Nursing Education. Journal of Nursing Education, 55, 65-71, 2015. (査読有)
2. Oyama Y, Maeda R. Cross-sectional online survey of nursing graduates' academic difficulties and related factors. Journal of Nursing Education and Practice, 7, 61-66. (査読有)

〔学会発表〕(計 2 件)

1. 大山裕美子，前田留美，丸光恵，井上智子．看護系大学院生の自己決定型学習準備性に関連する要因．日本看護学教育学会第 25 回学術集会，2015 年 8 月，徳島市．
2. 大山裕美子．看護系大学院生の学修上の困難感とその関連要因．日本看護学教育学会第 27 回学術集会，2017 年 8 月，宜野湾市．

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。